

愛知の人材 ラオスでキラリ

美浜の磯部さん 稲作効率化へ栽培暦を

磯部さんは、美浜町でキュウリなどを栽培する農家。もともとボランティアには興味があったが、国際

協力事業団(J I C A)の青年海外協力隊の活動ぶりを中日新聞で読んだのがきっかけで、協力隊

に応募した。

磯部さんは独身。家の農作業は申し訳ないと思いながらも両親に任せ、昨年一月から、ことしの十二月

まで二年間の予定でラオス北部のルアンナムター県へ。

もち米は似た稲作が主体で、年に二回の二期作を行っているものの、冬の冷え込みなどで栽培はラ

オスの中でも難しい。磯部さんが現地の農作業を見ると、まく種の量や、化学肥料のやり方、水管理

などが農家によってばらばら。

「農家の人たちから、どういう時に収穫が上がったかを聞いて回り、この地に一番適した稲作方法

を見つけ、それを栽培暦としてまとめられれば」と磯部さんは話す。

豊橋の木下さん 農民の収入向上を模索

木下さんは、J I C Aの契約スタッフ。外国NGOを側面支援し、農村部の貧困をなくす活動を続けて

いる。

小さいころ、世界各国の人々の暮らしを紹介した本を見て「なぜ、よく似た顔の人々なのに、日本

ちが 違「うんだろう」と疑問を抱いた。しょうがくろくねん そつぎょうぶんしゅう 小学六年の卒業文集には「まず 貧しい人を助けたい」としょうらい ゆめ 将来の夢をか書いた。

なごやだい だいがくいんこくさいかいほつけんきゅうか まな さんねんまえ 名古屋大の大学院国際開発研究科で学び、三年前ラオスへ。まず のうそん えん 貧しい農村にまん延するアヘン中毒者のリハビリや大人へのしきじきょういく と 識字教育に取り組んだ。

こうしたひとびと じりつ 自立できるような収 入の必要性を 実感。ラオス 北部のウドムサイ県で、少数 民族ルー族の女性らから 手 につむいだ 木綿の織物の秘めた商品性を発掘。市場開拓に乗り出し、今では ラオスを訪れる観光客に人気を集めつつある。

「JICAとの けいやく 契約は、この さんがつ 三月までだが、 じもと むらびと 地元の村人たちから「心の支えになってほしい」と こんがん 懇願され、さらに いちねん 一年、ラオスにとどまる。

「 ありもの ふるさとあいち ありまつしほり その ギじゅつ ほどこ 織物は、故郷愛知の有松絞りのような染めの技術を 施 すなどしたら、もっと 素晴らしい商品に できるかも」と ゆめ ひろ 夢を広げている。

ラオス 国内で JICA 関係の 国際援助に携 わる日本人は 約二百五十人。「都道府県別の 内訳は わ 分からないが、なごやだい だいがくいんこくさいかいほつけんきゅうか ありちけん 名古屋大には大学院国際開発研究科もあり 愛知県からのスタッフの活躍は 目立つ」 (和田孝英 JICAラオス事務所次長) という。

ちゅうにしんぶん ちゅうにしんぶん 中日新聞 2003年2月20日 木曜日